

倒産を乗り越えて

岡本硝子(株) 商品開発本部 知的財産部

新井 敦

Through experience of the bankruptcy of the company.

Atsushi Arai

Intellectual Property Department, Research & Development Div. Okamoto Glass Co.,Ltd.

1. 絶望から再起へ

忘れもしない1999年4月28日午後3時。東京証券取引所の取引終了時刻である。当時働いていた工場の食堂に全従業員が集合させられた。東京の本社や他の工場でも同様に社員全員が集合していると聞いた。列の前には工場長をはじめ何人かの幹部の他に知らぬ背広姿もこちらに顔を向けている。後で聞くと弁護士だったらしい。門の脇には警察車両が停まっていたとの話もあり、ただならぬ雰囲気を感じた。

そして工場長の話が始まる。「会社更生法の適用を申請した…皆さんの給料は保証されるので心配しないで…」のあとはもうなにも聞こえなくなった。両耳が火がついたように熱くなった。たぶん真っ赤だったのではないか。怒りではない。極度の失望、絶望と不安であった。入社以来20年近くをかけて築き上げてきたものがすべて無駄になってしまったと思った。実績も地位も仕事の進め方もなにもかも全部。ふと気付けば全身が汗ばんでいた。平和ボケした時

代に生きる戦争を知らない私であるが、終戦時の玉音放送ほどの衝撃であったかもしれない。私が43歳、長男が中1、次男が小6、娘はその月に小学校に入学したばかりであった。

その日帰宅しても、会社が倒産したことをなかなか女房に言い出せずにそわそわしていた。まるで自首したいのに自首できない小心者の犯罪者のように。しかし現実であった。生きた心地がしなかった。

そのうち私の実家から電話がかかってきて、会社の倒産のニュースがテレビで放映されたという。「報道は本当か?」と。それで女房にばれた。参った。変な汗がじっとりと滲み出てきた。でも、よかったのかもしれない。いつまで経っても自分からは言い出せなかったかもしれない。女房もそれなりにショックだっただろうが、あたふたとうろたえたりせず普段通りに振る舞っていてくれた。あえて平静を装ってしてくれたのかもしれない。ありがたかった。私はとにかく自分の心を落ち着かせるのに精一杯で、幽霊のように宙をふわふわと漂っていたと思う。

労せずして女房にばれてしまい、自分から白状しなければならぬ重圧から解放されたこともあり、夜になるとだいぶ冷静さを取り戻したように思う。その日のうちに大学時代の恩師に

〒277-0872

千葉県柏市十余二 380 番地

TEL 04-7137-3128

FAX 04-7137-3135

E-mail: a-arai@okamoto-glass.co.jp

電話をして、とりあえず状況を聞いていただいたと記憶している。

幸いにもその恩師のお陰で比較的早く転職先が見つかった。その年の7月30日付けで退職し、8月2日の月曜日から新たな会社で働き始めることができた。生活用ガラス製品メーカーから工業用光学系ガラス部品メーカーへと事業分野が変わったものの、業種・職種や待遇・処遇もほとんど変わらず幸運であった。63歳になった現在でもその会社でお世話になり続けている。

あのときはすべてが無駄になってしまったと思ったが、無駄になったものなど一つもなかった。一生懸命に取り組んできたことが無駄になるはずはなかったのだ。運もよかったのだろうと思う。そう、翌年の年賀状に決意をこめて書いた言葉を今でもはっきりと覚えている。

「初心を忘れない。学んだことはなに一つ無駄にしない」

退職した日の翌々日であり新たな会社に初出勤する前の日でもあったが、娘から可愛いキャラクター封筒を手渡された。表には「おとうさんへ」と書かれている。取り出したメッセージカードには覚えたばかりのたどどしいひらがなが並んでいた。女房が書かせたのだろう。励ましの言葉だ。通勤電車の挿絵が添えら

れていて、その2両目には一人私が乗っているようである。

嬉しくてありがたくて声が震えそうになるのをこらえて、娘に「ありがとうね」と言った。そして、心の中で答えた。女房にも。

「大丈夫、絶対頑張るよ。任せとけ！」

倒産した会社はその後幸いにも同じ業界の会社に統合されて、その遺伝子は今も受け継がれているように思う。当時の同僚・仲間たちや後輩たちはそれぞれに難関を乗り越えて多くがその会社で元気に働いている。今でも業界の会合等で懐かしい顔たちに出会う。良かったと思う。

一つ忘れられない情景がある。退職の日、中庭の芝生に工場長を見つけて挨拶をした。

「会社がこんなになっちゃったからなあ。ご苦労さまだったなあ」と元気なく哀しそうに返してくれた工場長がなんだかとても小さく年老いて見えて、胸が詰まる思いだった。

2. 号泣／倒産の翌日

私が社会人としての第一歩を踏み出した会社は1999年4月28日に倒産した。

世間は翌日から楽しいゴールデンウィーク。連休中では転職活動もままならず、私たち家族も私の実家に帰省した。私の足取りは重い。地



写真1 娘からのメッセージカード

面に足が着いていない。目の焦点も合っているような、合っていないような。会社の負債は約4百億円と聞いた。とりあえず当面の給料は保証されるとしても、将来を考えれば、まだ小さい子どもたちのことを考えれば、早く転職した方がいいと考えた。とにかく将来への不安で胸がいっぱいだった。

実家では早速転職の話になった。とはいえ、群馬で暮らす身内に有力な人脈を持っている人物などいるはずもなく、みんなただ不安で心配なだけだ。父や母から「どうするんだ?」「どうするの?」と問われても、答えなど持ち合わせていない。むしろ私が聞きたい。「どうすりゃいい?」

身を切られるような思いで家族を連れて帰省して、その上さらに責められているようで、つぶれそうな傷だらけの心に塩をすり込まれているようで耐えられなかった。倒産の翌日だ。昨日の今日だ。立ってられないくらい不安なのは私の方だ。「俺がなにか悪いことをしたか? 一生懸命働いてきただけだろう」。一人逃げ出すように実家から飛び出して、近所の伯母の家に顔を出した。

だが、挨拶はしたものの伯母になにをどう話しているのか分からない。出されたお茶を前に黙り込んで困ったような顔をしていると、伯母が微笑むように言った。

「たいへんだったねえ。断腸の思いで帰ってきたんだろう。なあ～に大丈夫さ。ゆっくりしていきな～」

途端に涙が溢れた。止まらなかった。堰が切れた。絞り出すように「チクショー」と何度も呟きながらボロボロ泣いた。それまでの人生が全部流れ出てしまうかのように。そのときは堪らなくただただ悔しかった。

その晩、伯父と伯母がすき焼きの食べ放題に連れて行ってくれた。そのときはすでに晴れ晴れとした気分で、お腹いっぱい肉を食べたっけ。

伯母は随分前に亡くなった。前橋市街を見下

ろす赤城山の斜面にお墓がある。

「おばちゃん、元気でやっているよ。あのときは泣かせてくれて本当にありがとう。肉をいっぱいご馳走してくれてありがとう」

3. 人生で一番ホッとしたとき／倒産を乗り越えて

オリンピックの女子水泳で金メダルを獲った選手が、弱冠14歳ながら「今までの人生で一番嬉しい」と言って世間を微笑ませてくれたのはもうかなり前のことだ。私の歳になれば「これまでの人生で一番云々」という話をしてももう違和感はないだろう。そろそろ人生を振り返ってもいい歳になった。

これまでの人生で一番ホッとしたとき、それは3人の子どものための学費をすべて払い終えたときである。やはり親であるから、子どもたちにはそれぞれやりたいことをやらせてあげたい、進みたい道に進ませてあげたいと思い、まじめに仕事中心の生活を送ってきた。自分のほしいものほとんど買わず、女房にさえなにも買ってやらず、あるときは預貯金を切り崩し、倒産・転職のときにも有休を一日も使わずにあくせく働いてきた。

しかし、「子どもたちのためだ」「我慢しなければ」と意識しながら働いたことは一度もなかった。一生懸命に目の前の課題や難題に取り組んだだけだ。きっとそれが働くということなのだろう。女房も働いてくれたし今も働いている。随分と助けられてきたと思う。ありがとう。

もう5年も前になるだろうか、最後の娘の学費を振り込んだ日、ついに肩の荷が下りた。心の底からホッとした。力が抜けてへなへたと座り込みそうになった。なんと重い荷物だったことか。これで父親としての役割は終わったと思った。カマキリやコオロギのようにメスに食べられてもいいと思った。もう死んでもいいんだと思ったらすごく気持ちが安らいだ。

でも、幸いなことにまだ生きている。やれ子どもが結婚するだの、孫が生まれただの、

七五三だの、入学だのと、どうやらまた別の荷物を持たされてしまったらしい。ただ、今度の荷物はだいぶ軽いし気持ちも楽だ。まあいいさ。誰かの笑顔のために働くのは楽しいことだ。みんなが笑顔で幸せなら私も笑顔で幸せだ。

そうそう、あのメッセージカードを書いてくれた娘は昨年結婚して苗字が変わった。今年は次男のところの孫がもう小学校に入学した。

倒産という大試練を乗り越えて懸命に生きてきた。3人の子どもたちはそれぞれ進みたい道を選び、無事にわが家から巣立っていった。家族はもちろん、多くの方々に支えていただいた

お陰である。心から感謝している。

家族というのは不思議な荷物である。相当に重たいのだが、逆に肩や背中の方からとびっきりの元気や感動を注いでくれるのだ。荷物などとは呼べないかけがえのないものだと思う。ちょっと前に下したばかりなのに、もう一度背負ってもいいかなあと思えてくる。もう歳だし、今さら背負うものもないのだが。

あれからもう20年。玉音放送（1945年）から東京オリンピック（1964年）までとほぼ同じ歳月が流れた。あの日のことを、その後のことを、忘れてしまわないうちに書き残しておこうと思った。